

ENGLISH EXPLETIVES: A MINIMALIST APPROACH

Erich M. Groat. 1995 : *Linguistic Inquiry* 26-2. pp.354-365

1. Overview

このスクウィブでは、Chomsky(1993)の虚辞構文の分析を検証していくつもりである。*there* 格は持っているが一致の素性に欠けている の形態論に従った、自然で、必然的に避けられないであろう特定化は、Minimalist の枠組みに自然な形で取り込まれ、虚辞構文の特性を十分に説明し得るものであるということを示したい。この分析は、Chomsky(1993)で AgrsP/TP の区別として示された(Pollock(1989)に従う)、一致と格チェックの間の区別に対して、ダイレクトな支持を与えるだろう。また、私は、虚辞は LF で「空」の解釈を持つ正当な LF object であるという仮定の下で、この分析は、自然な形で虚辞 *it* との振る舞いの違い(McCloskey(1991)に従う)をも説明できる、ということも示すつもりだ。*there* 虚辞構文の観点から、この分析は、LF での定の、そして不定の NP の解釈に必要な構造的位相に関する Diesing(1992)の分析をもびしと支持する。

2. Introduction

Chomsky(1991)は、(1a-b)のような文では *a man* という NP は LF で AgrsP まで繰り上がり、虚辞 *there* に接合(adjoin)する、と論じている。

- (1) a. [AgrsP[there] is [vP[NP a man] in the room]]. (S-structure)
b. [AgrsP[[NP a man]_i there] is [vP t_i in the room]]. (LF)

Chomsky(1991)は、*there* は、LF で解釈可能となるために NP が接合しなければならない、「LF 接辞」である、と仮定している。従って、完全解釈の原理は、NP(この場合 *a man*)の *there* への繰り上げを要求する。(2)(Chomsky の(44a))では、恐らく ECP の違反となるので、*a man* は *there* へ接合できない。

- (2) a. * There seems [CP that [AgrsP[a man] is in the room]]. (S-structure)
b. [[a man]_i there] seems [CP that [AgrsP t_i is in the room]]. (LF)

(2b)において、*a man* を *there* へ接合すると ECP の違反になるので、(2a)は非文である。しかし(2b)の場合は繰り上げが起こらないとすれば、*there* は LF でホストなしの接辞として残ることになる。ここでも Chomsky(1991)に従うと、ホストなしの接辞は解釈不能、ということになる。(2)の非文法性に対する説明は従って、*there* が LF 接辞であるという stipulation に全面的に頼らなければならない。

虚辞に接合せずに、NP が SpecAgrsP の要素と交替し、その要素を削除して、LF 接辞を仮定する必要性を排除することが可能であることにも気付くべきである。しかし、それでは(3a-b)の両方に同じ LF 表示が派生してしまう。

- (3) a. There is [vP[NP a man] in the room].
b. [NP A man]_i is [vP t_i in the room].

しかしこれらの文は、明らかに同意ではない。つまり、(3a)は *a man* には非指定的読みのみが可能であるのに対して、(3b)には指定的、指示的読みも許される。この代替分析による、同意性の誤った予測を避けるため、Chomsky(1991)は代わりに *there* の接合を仮定している。(3a)の *a man* の義務的な非指定的読みは、LF 接辞 *there* への接合によって NP が強制的に非指定的な読みをもらう、という stipulation による意味特性の結果である。

Chomsky(1993)は、全ての移動は形態的素性のチェックを求めて起こるのだという仮定の下に、同じ分析を展開している。(1a)では、*a man* という NP は LF で SpecAgrsP 位置で素性をチェックするために繰り上がらなければならない。そこでチェックされる素性は NP の 素性 つまり人称・数(他言語の性と同じ) と格素性である。素性は Agrs⁰ そのものに対してチェックを受ける(そして "Agrs の N 素性"とみなされる)。格素性は、英語では Agrs⁰ に接合するとされている T⁰(T の N 素性)に対してチェックを受ける。LF で素性をチェックするために AgrsP へ移動する際に、*a man* は *there* に接合し、(1b)を派生する。

この構造の再分析を進行する前に、Chomsky(1993)で展開された、正当性と解釈可能性という大事な区別を検証したい。正当な表示は正当な object によってのみ構成される。PF と LF のインターフェイスレベルは正当な object でのみ構成されなくてはならず、排他的に正当な object で構成される PF と LF の両方の構造で起こる派生は、集中(*converge*)すると言われている。そして、未チェックの形態的素性を持っている範疇は不当な LF object だから、全ての範疇は LF 以前に全ての形態的素性のチェックを受けなければならない。しかし、排他的に正当な object で構成されている表示が解釈可能とは限らない。Chomsky(1993)は *there* は LF 接辞であり、解釈可能な LF object となるために何か接合してくれるものを要求するのだという見解を示している。この解釈可能であるかどうかということこそが、*there* を "LF 接辞"であるとみなす理由である。*there* が LF で未接合のままだと、まだ正当な object ではあるので、派生が集中する(他の全ての派生によって創られた object が LF で正当であると仮定すればの話である。)。しかし、未接合のままでは、*there* は LF で何の解釈も受けないので、派生は "集中するがなんかわけが分からない"(Chomsky 1993:33)

Chomsky の分析は、Affect $\hat{a}h$ という操作がある範疇の正当性に貢献しないとすれば、その範疇に対する Affect $\hat{a}f$ という操作は禁止される、という Minimalist の Greed の原理に基づいている。特に重要なことは、ある範疇が他の範疇の形態的、または解釈的要求を満たすためだけに Affect $\hat{a}h$ を受ける必要はない、ということである。そうすると、(2)で *a man* は埋め込み AgrsP の指定部の位置においてすでに格素性と素性のチェックを受けているのであり、*there* に接合するために繰り上がることはないはずである。その結果「なんかわけの分からない」派生が集中する。Chomsky(1991)が、前置詞の目的語の繰り上げが ECP 違反を引き起こさないとして排除しなかった(4)(Chomsky 1993:(26b))にも同じことが言える。

(4) * There seems [_{PP} to [_{NP} a strange man]] that it is raining outside.

ここでは、*a strange man* は格素性と素性の、PP による局地的なチェックを受けている。そうすると、*a strange man* を *there* に接合するために繰り上げる、という必要が全くなく、従って Greed の原理に従えば、この繰り上げは許されず、*there* は LF で未接合のまま残ることになる。未接合の

there は正当だから派生は集中するが、その LF は *there* が解釈不能であるから「なんだかわけが分からない」。

3. An Unnecessary Stipulation and Its Elimination

there が音韻的に具現した LF 接辞であるという注釈(stipulation)は問題がある。まず、*there* は構造保持の立場から最大投射であると予測される。なぜなら、(a) *there* は指定部位置を占めている(b) 最大投射である NP が接合する(かもしれない)からである。私の知るかぎりでは、XP(最大投射)の「接辞」は前例がない。もちろん、このこと自体は確固たる根拠があるわけではない。しかし、*there* についてそのような主張をすると、形態統語的 object の新たなクラス、つまり LF の句接辞というクラスを設定していることになる。形態統語論的 object の新しいクラスを英語の一形態素の基本に据えるということは、これから論じるように、しなくてもいいならしない方がいいだろう。

次に、*there* を正当な LF object として特徴づけるに際して、この分析は、*there* は単一メンバーの項連鎖であると仮定している(Chomsky 1993)。つまり、*there* は tree の形態素性(格素性)のチェックを受けられる位置に適切に挿入されることにより、項位置である SpecAgrsP で一枚札連鎖を形成するのである。*there* がいかなる範疇の項でもなく、どの範疇の接合を受ける必要もない(つまり *there* が正当だと仮定されている(3))のになぜ虚辞が項連鎖を形成するとされなければならないかは定かではない。私の分析により §4 で見るように、*there* の連鎖のステータスは問題点を帯びることになるだろう。なぜなら *there* は LF で目に見えないからである。

there が LF 句接辞であるという注釈は、実は排除することができる。格と一致の素性に責任を負うものとして、 T° と Agrs^o という2つの個別の機能的 head がある(Pollock 1989 に従う)ということ思い起してほしい。英語では T° はスペルアウトの前に Agrs^o に接合し、結果として NP の SpecAgrsP への移動は T° 、Agrs^o 両方の N 素性をチェックする。英語の T° は強い N 素性を持っているが、それはこの N 素性が必ずスペルアウト以前にチェックを受けなければならないことを意味する。なぜなら素性のチェックによりその素性の削除が起こり、インターフェイスレベルで正当な object でない未チェックの形態素は PF で明示されてはならないからである。弱い素性は PF で目に見えないと仮定されているから、弱い素性は問題を引き起こさない。強い素性はしかし、PF で明示される。であるから、強い素性はチェックを受け、それによってスペルアウト以前に削除されなければならない。そうしなければ、PF で派生は集中しないだろう。

このケースでは、格素性を保有するある NP はスペルアウト以前に SpecAgrsP を占め、Agrs^o に接合した T° の強い N 素性(格素性)をチェックしなければならない。Agrs^o もまた、N 素性(NP の素性に対してチェックする)を保持している。その素性は弱い素性なので、スペルアウト後までチェックを受ける必要はない。しかし、NP が T° に対して格素性をチェックしに SpecAgrsP に繰り上がるなら、Agrs^o に対して素性をも同時にチェックするはずである。

そこで、*there* は格位置にいる、一致要素に欠けた要素なので、格素性をチェックして素性をチェックしない NP であると仮定しよう。*there* がスペルアウト以前に SpecAgrsP に挿入されるとすると、 T° (Agrs^o に接合する)はその強い格素性をスペルアウト以前にチェックし、正当性が生じる。

もし NP が繰り上がらなかつたら、その NP は LF で、Agrs 同様に未チェック要素を保持するこ

とになるだろう。そうすれば、LF で Agrs^0 と NP という2つの不当な object が存在することになり、派生が衝突するだろう。

実は、Chomsky(1993)は間接的に、私が提案したように、*there* は T^0 の(主)格素性(つまりN素性)をチェックする、ということをはのめかしている。しかしこれは *there* について我々が注記すべきことの全てである。つまり、*there* が T^0 のN素性をチェックする、ということである。ここで重要なのは、*there* が Agrs のN素性をチェックしないということである。そうすると、NP は SpecAgrsP に接合し、 Agrs のN素性をチェックし、削除しなければならない。そのNP がすでにどこかで素性チェックされているとすれば((2)や(4)のように)、そのNP は(Greedの原理に従って)どこにも動かず、 Agrs のN素性はLFで未チェックのまま残り、派生は集中しないだろう。そうすると、*there* に繰り上がって接合するNPを持たない(2)や(4)は、単に排他的に正当な object で構成されるLF表示を派生できないという理由で排除されるだろう。

我々はここでフレーズLF接辞に関する一連の仮定を排除し、*there* について語彙的 stipulation をすることで虚辞構文の振る舞いを説明することができる。即ち、*there* の範疇は、人称・数を表し普通は Agrs^0 にチェックされる素性に欠け、 T^0 にチェックされる格素性は保持しているという、欠如NPであるということである。この分析は、*there* についての標準的な、つまり、格を要求し動詞との一致を要求しない形態的特性を持っている、という仮定(Chomsky 1986、Lasnik 1992、Davis 1984)に立ち返るべきである、ということを表している。*there* の性質について古い観察を引き合いに出したのだが、この分析は Minimalist 理論、特に格チェックと一致要素のチェックの区別を支持する。つまり、格は必ずしも一致要素と同時にチェックを受ける必要はないということである。

4. The Interpretation of *there* and *it*

Chomsky(1993)のように、上で展開してきた分析では、格素性チェックされた *there* は、正当なLF object であると仮定される。しかし、この分析では(2)と(4)は、未接合の *there* は意味不明であると主張することによってではなく、 Agrs^0 のN素性がLF以前にチェックされないと考えることによって排除される。ここで、この分析は今のところ *there* の解釈にはまだ言及してはいない。なぜなら、(1)と(2)/(4)の文法性における差では *there* の意味的価値に対する観察には頼っていないからである。しかし、*there* は実はLFで接合するとかして意味解釈を持っているのだとする理由が十分にあると思うのである。*there* 虚辞・*it* 虚辞の構文の比較を基礎として、虚辞の解釈は「空」の解釈である、と論じていくつもりである。

McCloskey(1991)は *it* 虚辞はLFでCP関連項に置き換わらない(つまりCP主語は SpecAgrsP に現われない)という事実に基づいて議論をしている。彼は、*there* 虚辞構文とは違って、*it* 虚辞構文では等位接続されたCP構文と屈折動詞の間に数の一致は見られない、と考えている。

- (5) a. [_{CP} That the president will be reelected] and [_{CP} that he will be impeached] are equally likely at this point.
- b. It { *is* / * *are* } equally likely [_{CP} that the president will be reelected] and [_{CP} that he will be impeached].

(5a)のように、等位接続された CP と動詞の一致は可能なのだが、(5b)のように、主語位置を虚辞 *it* が占めているときは不可能である。McCloskey はこのことを、(5b)のような文において虚辞の交替はないという証拠であると捉えている。

McCloskey の観察はここで提案されている虚辞の分析の下で説明がつく。ここで簡単に、標準と同じく、*it* は格も 素性もチェックする NP で、3 人称・単数(典型的なデフォルトの値である)であると言っておこう。*there* と *it* の唯一の形態統語的相違は、*it* は 素性を保有しているが *there* はそうでないということである。*it* が SpecAgrsP に挿入されるとすれば、T⁰(Agrs⁰ に接合する)の格素性と Agrs⁰ の N 素性は両方ともチェックを受け削除される。((5b)の等位接続された CP は動詞後位で別々に認可されているに違いない。) *it* の挿入により Agrs と T に関連する素性は全てチェックされるから、チェックされるべき素性は AgrsP には残らず、Greed によって *it* に結合する NP は一つもない。このことにより、McCloskey が論じているように、*it* は何かと接合したり、置き換わったりすることはない。

しかし、このことは、*it* は決して「意味不明」なわけでもなく、未接合のまま LF で残存する、という示唆を含む。ここで *it* は LF で削除されるという仮説が立つかもしれない。しかし、*it* の全ての素性がチェックされる限り、それは正当な object なのであり、それ以上の操作は正当性に関わらないから、Greed の下では Affect á r という操作はかけられない。以上から、*it* は LF インターフェイスで生き残ると仮定しよう。そうすれば、*it* は解釈可能であるということになるが、「何もするな」という解釈規定の「空」として解釈される。

ここで *there* に関して同じ仮定、つまり *there* は解釈部門で無視されるとするのが自然になってくる。従って全ての虚辞 NP は「空」として解釈される、と仮定すれば、その範疇の内部構造が無視されることになる。 (2)と(4)の未接合の *there* は(1)のそれと同様に、決して意味不明ではない。Chomsky(1993:33)は *there* に接合した NP は、「単語内部」にあるものだから見えない(*there* が LF 接辞であるという彼の考えの下で)、と論じている。Chomsky の定式化は目茶苦茶である。即ち、統語的には *there* は最大投射であってそれに接合する NP も最大投射なのに、Chomsky はこの構造を指して「単語内部」という言葉を用いているのである。「単語」は伝統的には X⁰ 構造を指すとされているが、ここでは「単語」の定義がどのように使われているかは定かでない。しかしながら、私の *there* の「空」解釈を受ける範疇であるという概念でも、接合した NP が不可視となるという現象が起こる。即ち、LF インターフェイスは、*it* をそうするように、*there* を全く無視するから、LF インターフェイスは「内部の」*there* を見ない、ということである。つまり、VP 中に痕跡を持つ NP 連鎖(*a man t*)の末項のみが LF で目に見える、といえる。

ここで、*there* の A 連鎖ステータスという疑わしい考えも排除されるということにも気付かねばならない。即ち、*there* は項でもなければ非項でもない、「空」として解釈される要素である。

この帰結は、Diesing(1992)の、非指定的不定 NP(nonspecific indefinite)は VP の領域内(=核視野)にいるが定 NP や指定的不定 NP は VP 外(=制限節)にいる、という不定性の説明にきっちり当てはまる。つまり、私と Diesing の分析では、虚辞は、核視野の領域において LF インターフェイスで「見える」ような不定 NP が接合するのだと予測される。このことはなぜ定 NP が *there* と関連を持ってないのかという理由になる。

- (6) a. * There is [_{NP} the man] in the room.
b. [_{NP} The man] is in the room.

定 NP が LF で VP の領域の外(つまり制限節中 = VP の上の Infl 構造中)にいなければならないのだとすれば、則ち SpecAgrsP にいる虚辞への接合は不可能である。なぜならその NP は VP の領域の外側で可視であるような構造を派生しない(*there* 接合する NP は *there* 「空」として解釈されるから不可視だし、その NP は基底の位置が SpecVP である時のみ LF インターフェイスで可視であるということを読み起してみよう)からである。このように、(6a)では *the man* によってなされる虚辞接合により、制限節において LF インターフェイスで定 NP が不可視となる。文は従って、統語的に正当であっても LF で意味的に不適格である。

以上の虚辞が意味的に「空」であるという考えは、実は(3a)と(3b)((7a-b)として繰り返してある)の間に同意性が見られないということも説明でき、一方で(6a)を排除できる。

- (7) a. There is [_{VP}[_{NP} a man] in the room].
b. [_{NP} A man]_i is [_{VP} t_i in the room].

(7a)では *a man* は LF で *there* に 素性をチェックするために接合する。しかし、LF インターフェイスは虚辞を「空」として解釈するから、LF で NP はその位置で解釈することはできない。そして、解釈規則にとっては SpecVP の痕跡のみが可視なので、*a man* に対して非指定的な読みが生じる。(7b)はしかし曖昧である。つまり、LF インターフェイスは SpecAgrsP にいる NP 連鎖の初項 *a man* も SpecVP にいる末項も両方とも認識するので、*a man* に対して指定的読みも可能なのである。連鎖の初項と末項の両方が LF インターフェイスで可視だからということで、曖昧性が説明されるのだ。

虚辞とそれに接合する NP が LF で「空」解釈を受けるというさらなる証拠は、束縛効果の中に見いだせる。Chomsky(1993)が束縛理論は LF でのみ適用されると仮定しているのが正しければ、則ち LF で SpecAgrsP の虚辞に接合する NP は再帰代名詞を、たとえ c 統御はしても束縛することはできないと予測される。なぜならその NP は不可視だからである。この予測は、Den Dikken(1995)で指摘されている(8)から生じる。

- (8) a. * There often seem [_{PP} to each other] to be [_{NP} men].
b. [?] Men often seem [_{PP} to each other] to be outside.

5. Discussion: A Possible Modification

このセクションではこれまで見たデータと矛盾しない、この分析にできる強化策を講じたい。Minimalist のアプローチの下では、拡大投射原理効果は T(英語では明示的に Agrs に接合する)の

強い N 素性を仮説立てることで捉えられる。強い素性は、明示的な繰り上げを受けた主語か、私が提案した *there* のどちらかによって、スペルアウト以前にチェックされなければならない。もしスペルアウト以前にチェックされないということがあれば、強い未チェック素性を解釈できないので PF で派生が衝突する。

これに代わる案は、虚辞は N 素性をチェックしない代わりに弱体化させる、ということである。即ち、PF は(弱い素性をそうするように)N 素性を無視するが、LF 部門でまだ残存し、適正なチェックを受ける必要があるということである。*there* のような虚辞は LF で、PF と同じ機能を果たす。即ち、ちょうど虚辞へ接合した NP が LF で「空」として解釈を受けるように、Agrs/T の N 素性は PF で「空」として解釈を受けるのである。

この分析の下では、*there* は格素性(T の強い N 素性)を弱めるがチェックしない。NP 主語は 素性だけでなく格素性をもチェックしに虚辞に接合するが、Procrastinate によってスペルアウト以前にそうすることは禁じられる。この分析は、普遍的に NP は明示的には虚辞に接合することはない、ということ的性格に予測する。即ち、虚辞は PF で強い Agrs または T の素性を弱体化 つまり正当させているのだから、Procrastinate は主語の虚辞への接合がスペルアウトの後まで延期されることを要求する。この分析は主語 NP の核の要求を満たす手段としては partitive のチェックは不要であるということも示す。即ち、(*there* ではなく)主語は T の N 素性に対して主格をチェックする範疇であり、LF で虚辞に接合することでそうするのである。Diesing(1992)の不定 NP の理論は私の虚辞に対する「空」解釈の分析と組合せると指定性効果が捉えられるのだから、非指定的 NP によって partitive がチェックを受ける必要がなくなるのである。

この代案に対する証拠が Icelandic に見いだされる。Jonas and Bobaljik(1993)に従って、Icelandic の非指定的主語は、虚辞が SpecAgrsP が虚辞によって占められていても、SpecTP の格をチェックするオプションを持っていると仮定したい。屈折動詞は明示的に Agrs に繰り上がり、(9)のような文を派生する(Jonas and Bobaljik の(16a)に基づく)。

- (9) [_{AgrsP} Það mundu [_{TP}[einhverjir bátar]_i hafa venið keyptir <sub>t_i]].
(there would some boats have been bought)</sub>

(9)で重要なのは、Agrs にいる屈折動詞 *mundu* が SpecTP にいる主語に一致していることである。このことは主語は Agrs に対して 素性をチェックするために LF で虚辞に接合する(主語は SpecTP ですでに自らの格素性をチェックしているので、LF で格を理由に繰り上がるのではないということをお忘れしないで欲しい)。SpecAgrsP における虚辞の存在は Icelandic の Agrs が強い N 素性を持っていることを示している。しかし、虚辞が実際に Agrs の N 素性をチェック そして削除 するのでしたら、則ち主語は Greed によって LF で虚辞に接合するのを制止される。なぜなら Agrs の領域にはチェックすべき素性が残っていないからである。このことは虚辞は Agrs の N 素性をチェックせずに弱体化させ、LF で主語にチェックをさせる、という代案を提示する。

6. Summary

Chomsky(1991)の *there* が LF 接辞であるという stipulation は不要である、ということを Chomsky (1993)の枠組みで論じてきた。ただ *there* が格素性をチェック(または弱体化)し 素性をそうしない語彙的範疇であるだけで stipulate しておけば虚辞の分布を説明するには十分である。*there* の振る舞いを説明するために新たに統語的 object(明示的句接辞)のクラスを仮定する必要はない。代わりに、辞書中の単一項の形態的特性に関して避けられないような stipulation さえしておけばいい。格と一致の間の区別を利用して、*there* は格をチェックするが 素性をそうしないという仮定が可能となる。虚辞 *it* の振る舞いもまた、*it* が 素性も同様にチェックして LF で交替したり接合されたりしない、ということを除いては、*it* も *there* も全く同じである、と仮定することで予測される。ここにおいて、虚辞は「空」解釈を持つ正当な LF object であるという結論に達せざるをえない。虚辞の解釈が「空」であるとするこの結論は、*there* に接合する定/不定 NP の解釈の容認性を、Diesing(1992)で提案された枠組みで予測し、このアプローチの支持をあおっている。

最後に、もう一つの可能性を提示しておいた。即ち、*there* のような虚辞は素性をチェックせずにただ強い素性を弱める(つまり正当 PF object)だけだ、ということである。この弱い素性は LF で虚辞に NP が接合することでチェックされる。この強化案は虚辞への明示的接合が起こらないということ予測し、独自に partitive 格を stipulate する(Belletti(1984)に従う)必要性を排除する。そのことは、格を理由に主語が明示的に SpecTP に移動する Icelandic の虚辞構文をも説明する。